

若年中心に発症、再発多い

激しい下痢や腹痛

潰瘍性大腸炎

激しい下痢や腹痛を繰り返す難病の一つ、潰瘍性大腸炎の患者が、毎年約五千人という勢いで増えている。重症度はさまざまだが、多くは薬物治療が必要。療などにより改善し日常生活を送れる。ただ、将来的に大腸がんを合併する恐れもあり、地道な治療が欠かせない。

(遠藤健司)

潰瘍性大腸炎は、大腸表面の粘膜に炎症や潰瘍、ただれができる病気。病変の広がり方によって▽直腸炎▽左側大腸炎▽全大腸炎に分類される(図参照)。

食事の欧米化とともに年々増加(グラフ参照)しており、主な症状は血便、下痢、腹痛、発熱など。便は出血を伴わない場合もある。厄介なのは、再発が多いこと。治療しつたん症状が消え、予防のための

薬物療法を続けていても、数カ月から数年後に再び症状が出現することが多く、症状が現れる活動期と一時的に治まる緩解期を繰り返す。また、頻度は少ないが、あらゆる治療に反応せず、全大腸を切除せざるを得ない重症者もいる。

「重症の人になると一日十数回、一、二時間おきに粘りけ

治療の基本は薬物療法。軽症から中等症の場合は、5-アミノサリチル酸製剤で炎症を抑える。中等症以上の場合には一般にステロイドが使われる。しかし、ステロイドは長期に投与し続けると副作用が問題となるため、近年、透析に似た「血球成分除去療法」を優先して行う病院が増えつ

投薬が基本「血球成分除去」も有効



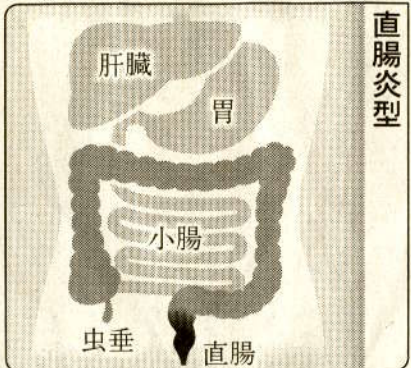
岡村正造副院長

のある血便が出て、トイレへ通い詰りとなるため夜眠れなくなるなど、非常につらい病気です」と説明するのは、愛知県豊橋市民病院の岡村正造副院長(消化器科)。十、二十歳の若年層で発症することが多く、進学、就職、結婚、出産などへの影響も多いという。

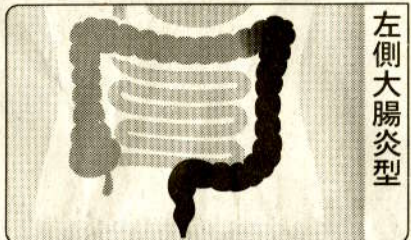
つある。同療法は血液を体外に取り出して、異常に活性化した白血球を取り除き、元に戻すというもの。副作用が少ないのが特徴で、中等・重症の人の六、七割で効果が出ているという。これらの治療で改善しない重症例には免疫抑制剤も試みられるが、それで

限などもほとんどなく、通常の日常生活が送れる」と強調する。再発しても、一般的に年齢とともに症状は軽くなる傾向があり、発症後四十八年は比較的、落ち着いた状態が続くことが多いという。

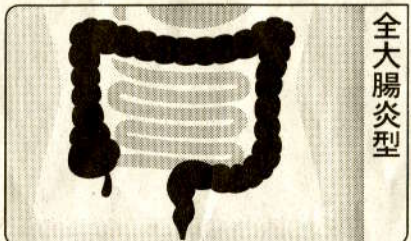
気がかりなのは、大腸がんの併発。大腸の粘膜に何度も炎症を繰り返すことで、がんになりやすい。全大腸炎型の場合、がん発症の確率は、発症から十年で1-2%、十五年で約5%、二十年で7-8%に達する。岡村副院長は「潰瘍性大腸炎は粘膜の表面上に広く病変がおよんでいるため、がんの早期診断が難しい。よくなった後も、油断せず、年に一度は内視鏡検査を受けてほしい」と話した。



直腸炎型



左側大腸炎型



全大腸炎型

病変の広がりによる潰瘍性大腸炎のタイプ

